仲間と親とあゆみ続けて

――32年間の障害者福祉実践

第3回　せんぼく障害者作業所で学んだ実践の基礎

ゆたか希望の家相談支援事業所
佐藤さと子
さとう　さとこ／日本福祉大学卒業後、社会福祉法人ゆたか福祉会に勤める。全障研愛知支部事務局長

2022年2月24日、ロシアによるウクライナへの侵攻が開始、連日のようにテレビで戦争の様子が報道されています。また、東日本大震災から11年を迎えた直後には、福島・宮城沖で震度6強の地震が2回発生。東北新幹線の脱線も心配しましたが、何よりも福島第一原子力発電所の存在が不安を駆り立てます。そうしたなかでも変わらない仲間たちの笑顔に日々励まされ、「戦争と平和」について考え続けています。

重い知的障害のある久野さん

1991年4月、私は結婚に伴いそれまで勤めていた名古屋の施設を退職し、大阪府堺市にある「せんぼく障害者作業所」（以下「せんぼく」）に転職しました。大所帯の作業所で、87名いる仲間の顔と名前を覚え、それぞれの障害特性と発達課題をつかむことにとても苦労しました。それを支えてくれたのは、きょうされん大阪支部主催の発達を学ぶ学習会や、当時せんぼくで仲間たちの発達診断をしていた高橋実さん（現・福山市立大学）の存在でした。

せんぼくで初めての担当になったのは、養護学校を卒業したばかりで、重度の知的障害と自閉症スペクトラム障害を併せもつ久野さんでした。知らないところに通所しはじめて不安いっぱい。職員のマンツーマン対応で、次の見通しを何度もことばで伝え、一つひとつの動作をいっしょにやっていきました。また、彼女が自分でやってみて、「できた」という手ごたえをことばとしぐさで共感して、達成感を意識してもらえるように働きかけていきました。

久野さんが少しずつ作業所に慣れてきた頃、同年5月、私は市内の大山公園（仁徳天皇陵の横）にテントを張って会費制の結婚式を挙げ、九州への新婚旅行で1週間仕事を休みました。仕事に復帰すると、久野さんは精神的な不安が強くなり、新聞紙の異食をするようになっていました。「学校卒業後の不安な時期に1週間もいなくなってごめんね」そう心から謝ったことを覚えています。それから私は久野さんの〝安心できる職員〟になろうと彼女との関係を一から築きなおすことを心に決めました。

一人にじっくり関わる実践をしていくために

その後、久野さんは、空き缶つぶしの仕事の工程をきちんと覚えて、自分で見通しをもってとりくめるようになっていきました。場面転換が苦手なので、散歩に行く時には靴を指差しして、「公園に行こう」と声をかけて行きます。公園では大好きなブランコに乗り、背中を押してあげるととてもいい笑顔になる久野さんでした。

ある日のこと。公園から作業所に帰る道中で久野さんがよその家の玄関に入ってしまい、「もし、家の方が出てきたらどうしよう…」とてもドキドキしたことがありました。（どうしてそんなことをしたのだろう?）。ちょうどその頃、発達を学ぶ学習会（講師は白石正久さんでした）でこんなお話を聞きました。「生後10ヵ月頃からの発見の喜びを味わう頃、子どもたちはもう『第2者』の膝は必要なくなり、文字通り心の中に心の支えがつくられていきます。『何かいいものないかなあ』という心の中のことばがまなざしにあらわれます。子どもたちにとって散歩で初めて出会うものはみんな、生まれて初めて目にするものです。そして、人様のおうちの玄関は特に大好きです」。

大山公園で挙げた結婚式

久野さんも「何かいいものないかなあ」とさがしているのかな？　職員がどう対応するのか見ているのかな？　と仮説を立てて、家に入ったことを注意をするのではなく見守ってみました。とはいえ、内心はひやひやでした。でも、この時期の発達の特徴を学んだことで、私の見方が大きく変わったのです。もし誰かに注意されたら職員としてきちんと説明をする、彼女の行動を止めるのではなく「何かいいものないかなあ」といっしょに楽しむ、彼女が帰りたいと思ったら「作業所に帰ったら○○しよう」と次の行動の見通しを伝えながら楽しく帰る、「今日も公園楽しかったね」と共感する…そんな日々を積み重ねていきました。また、対応する職員を私だけに固定化せず、交替するようにしていくことで、いろんな職員と活動ができるようにもなっていきました。

久野さんのように1歳半前後の発達につまずきがある場合、心が揺れて、行ったり来たりを繰り返す葛藤がよく見られるようになるといいます。そんな仲間の葛藤を、見守りつつ、「本人が葛藤を自分で乗り越えていくことを支える支援」が大切だと実感するようになりました。